

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02323

研究課題名(和文)1964年から1989年にかけての自由保育「運動」の史的検討

研究課題名(英文)Historical examination of the jiyu-hoiku "movement" from 1964 to 1989

研究代表者

武内 裕明 (TAKEUCHI, Hiroaki)

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：50583019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通じて、自由保育「運動」の萌芽には、集団主義の保育の立場での保育実践の検討の中で、集団としての望ましさばかりでなく個の思いが重視されていく過程があったことが明らかになった。研究期間内の自由保育「運動」は、平井信義のような子ども中心の原理的な主張ばかりでなく、個と集団の関係を意識し、集団よりも個人の思いなどを重視する立場の実践が受け入れられることで受容されていった。自由保育の発想は、課業中心や集団中心の保育実践に対してはその制約を緩めるものとして効果的に機能した。一方で、既に子ども中心の発想をする保育実践に対しては、保育者の具体的な指導を妨げる機能を果たした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、自由保育「運動」が集団主義的な保育実践などの中で生じた、個の思いをより重視する立場に始まり、集団主義的な、あるいは課業中心の保育の強い制約を緩める際に大きな貢献をしてきたことが明らかになった。当時の保育に影響を与えたのは単純な個人中心、子ども中心の主張ではなく、個と集団の関係の中での個の育ちを重視する保育実践に裏打ちされた子ども中心の原理であった。そのため、批判すべき現状がないままにより自由な保育が志向された場合には、自由保育の発想は保育者の指導を妨げ、放任に近い状況を誘発することにつながる。自由保育の発想が放任に近づく原因を歴史的に明らかにした点に本研究の重要な意義がある。

研究成果の概要(英文)：Through this research, it has become clear that, as a preliminary step to the Jiyu-Hoiku "movement", consideration of collectivist childcare practices was heavily involved. In this environment, not only the desirability of the group but also the thoughts of the individual became increasingly important. The Jiyu-Hoiku "movement" during the research period was not only based on child-centered principles such as Nobuyoshi Hirai's, but also practices that was conscious of the relationship between the individual and the group and valued the thoughts of the individual. The idea of Jiyu-Hoiku functioned effectively as a way to loosen the constraints on childcare practices that are task-centered or group-centered. On the other hand, in childcare practices that are already based on a child-centered approach, it has served to hinder childcare workers from providing specific guidance.

研究分野：保育学

キーワード：自由保育 『保育の手帖』 『保育専科』 平井信義 集団主義の保育 個と集団の関係

1. 研究開始当初の背景

戦後日本の幼児教育の重要な転換点として、1989年の幼稚園教育要領改訂が挙げられる。この改訂で、幼児教育は環境を通じた保育であり、子どもの主体性を尊重し、自発的な活動としての遊びを中心とした指導によって子どもの発達を促進するものであるという、現代まで続く基本的な保育の枠組みが確立された。当時の保育に関する主張を主導した一人である平井信義は、このような保育を自由保育として強く主張していた。自由保育への期待は1989年にかけて徐々に醸成され、唱道者たちの間だけでなく、当時の保育者たちの間でも新しい保育をめざす機運が高まった。この意味では、1989年の要領改訂にかけての保育の改革を求める盛り上がりは、自由保育「運動」と評価することができる。現時点から振り返ると、自由保育は、教育の内部的な理想に根差した実践者を巻き込んだ改革という意味では、現時点までで最後の保育改革運動と評価できる。

自由保育「運動」は、保育問題研究会の主張などの影響も主要な論者を通して取り込むことで、単なる自由主義的な原則では説明できない実践原理を構築した。一方で、その子ども中心主義的な発想は、自由保育の受容過程で放任的な傾向を生んだと批判されることもある。自由保育を「運動」として捉え、その展開と受容の過程を整理することで、このような側面を含めた成果の総括が可能になる。

これまでの自由保育に関する研究や当事者の主張は、主に自由保育の理論に関するものが中心となっていた。これに対して、本研究では、自由保育の理論面だけでなく、この時代の歴史的状況のなかでの対立する保育の原理との関係や、限られた理論家以外の主張も自由保育「運動」の重要な構成部分として、検討の対象とし、自由保育を子ども中心の考えに共鳴し諸々の主張をする受容者も含めて共同構成された「運動」と見ることによって検討することを試みるものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自由保育論の受容過程を「運動」として捉え直し、1964年から1989年までの二度の幼稚園教育要領改訂の期間における自由保育の受容過程を実証的に検討することである。

3. 研究の方法

本研究では、自由保育「運動」として自由保育の展開・受容過程を明らかにするために、自由保育に関する議論において中心的な役割を果たしていくことになる『保育専科』及び、その前身となる雑誌であり保育問題研究会の影響も強く受けていた『保育の手帖』の記事を主要な対象とした。

4. 研究成果

(1) 集団主義保育の議論が育んだ自由保育的発想の萌芽

まず、『保育の手帖』における研究対象となる期間の自由保育への機運は、保育問題研究会の会員など集団主義の保育の立場に立つ論者たちの主張においてその萌芽が認められることは特筆すべき点である。集団主義的な発想に立っていた三木安正らの保育内容研究会においても、保育計画を保育者が議論する中で、望ましい集団作りという観点だけでなく、一見問題に見える子どもの姿の内にそうせざるを得ない気持ちを読み取るなど、個の心情を重視する変化が見られる。

『保育の手帖』における保育内容研究会の議論は、民主的な社会を作ること重視し、それを歪ませることに繋がる領域を教科的に扱う発想に反対していた点、子どもの能力を数量的に把握する評価ではなく、指導まで含めたプロセスの中で子どもを評価する発想を行っていた点などは、現代まで続く保育の発想の基盤となるものであることが確認できた。これらの発想は自由保育と違いのない部分であり、保育内容研究会の議論が現代の保育の基盤を形成する重要な議論であったことが確認できる。また、集団を重視し、計画的な指導で望ましい集団を作るという保育内容研究会の採用する立場に関しては、会員内部でも強い緊張関係が存在していたこと、及び個人が集団との関係抜きには存在し得ないことを前提とするものの、個別の実践に関する議論を通じて望ましい姿を直接に求めることよりも、次第に個人の一見問題に見える姿に子ども側のそうせざるを得ない気持ちを読み取り、子どもたちが適切な時期に自然に発達していく面を認める形に変化しつつあったことが指摘できる。保育内容研究会を指導した三木に関しては、この変容がはっきりと表れるのは会の活動がなくなった後に連載された問題児の研究以降ではあったが、保育実践にほぼ関与してこなかった三木の問題児に対する見方を培ったのは、保育内容研究会での個別の実践についての討議であったといえるだろう。この討議の中で、三木は保育を計画的に指導するために個例を収集しているという立場を変えてはいないものの、個々の子どもやその状況をより深く知ろうとする発言を増やしていった。これは、研究期間以前の保育内容研究会で三木が取っていた、望ましい実践的な力を培う面に焦点を当てた個人を考慮しない

発想と比べると、大きな変容であった。同様に、集団主義の中心的な論者でもあった畑谷も、保育内容研究会での議論を経て計画的に望ましい集団に早期に近づけていくという発想の修正を迫られていた。以上の内容を踏まえると、『保育の手帖』における保育内容研究会の議論は、民主的な社会を作るという発想を共有し、集団との関係を意識しながらも、望ましい態度を単に獲得させることよりも個人の気持ちを考慮した上で発達していくプロセスを重視することになる1970年代以降の自由保育的な発想に連続していく形へと会の議論内容を変容させていたといえる。

保育問題研究会の会員でもあった鈴木とくの『保育の手帖』での議論もまた、単に集団主義的な傾向を示すのではなく、平井信義らとの3歳児研究などにおいて、自由保育に繋がる発想と関連し、また保育実践に関する平井の知見の蓄積に影響するものであったといえる。

鈴木は、保育問題研究会に所属しながらも同会に対しても批判意識を失わず、自由保育論を唱道していく平井とともに長らく保育を学んだ人物であった。このこともあり、鈴木の子保育論のうち、保育者の計画通りに進める保育への批判、子ども理解や子どもとの関係、自主性の育成、評価に関しては、ほぼその後の自由保育の議論と同質の発想が示されていたことが明らかになった。一方で、3歳児保育であったとしてもその一年間のうちに自分の思う通りにならないこと、他の人も自分と同じように考えがあることなどを知るなかで集団との間に折り合いをつけ、協力し合う関係に近づくように保育者が働きかけるべきであると考えていた点は、早期から望ましい集団への志向を示すものであり、その後の自由保育の議論では強調されることの少ない論点であった。同時代の保育に学び自由保育「運動」をけん引した本吉圓子や大場牧夫などの実践は個と集団の関係を重要な観点として進められており、集団保育に関する議論の成果は反映されていると考えられる。しかし、自由保育の発想はあくまで個を中心に保育を構想するため、自由保育的な発想だけに学んだ場合には集団と個の関係に関する議論の成果は明示的に継承されず、結果として徐々に個人を中心とし、個を満たすという面だけが強調される発想が残されることになったことが予期できる。集団との関係において個の発達を論じ、個の欲求だけが通らないということをお教えしようとした鈴木らの発想は、1970年代に展開された豊饒な自由保育論の前提となった重要な議論であった。

(2) 自由保育「運動」の牽引者たちの議論の成果

自由保育運動を牽引した論者たちに関しても、集団主義の保育との関係は無視できないものであった。自由保育の原理的主張に関しては平井信義の主張は典型的かつ影響力が大きかったものの、同時代の自由保育的な発想には、個と集団の関係を意識した保育実践を展開しようとする大場牧夫や本吉圓子などの実践の奥深さを通して影響力を深めていくことになる。

自由保育という言葉で戦後の自由保育「運動」の原理的主張を展開した平井信義は、集団主義の保育の中でも自由保育的な発想に近い鈴木とくらと共に連載を進めた『保育の手帖』における3歳児研究を経る中で、自らの保育論を確立していったと捉えられる。平井は、3歳児保育に関する記事の連載直後にはそれ以前の医学分野の専門家としての立ち位置に近い発想に立っていたことが連載記事から確認できている。平井の発想の根幹は1968年以来大きく変わらない形で存在していたとはいえ、平井の保育論の原型は少なくとも時期的には3歳児研究の進展の中で明確になってきたと考えられる。とりわけ、1970年代初頭のノーカリキュラム論に近い発想や自主性の発達論、任せる保育など、平井を代表する保育論と同様の発想が1970年度以降の記事でははっきりと確認できることはノーカリキュラム論の提唱に向けて平井の考えが整理されていったことを示すものである。

平井の立場は大きく変わったわけではないものの、3歳児保育研究を通じて保育実践に触れる中で原理的な立場を確立していった。しかし、1970年代初頭の平井による原則と評せるような抽象的な原理は、指導計画を具体的に構想するためには不十分であり、子ども中心主義的な発想で保育を問い直す点で意義があるとはいえ、保育者の意図性を保育から排除しかねない危うさをもったものであったことも指摘せざるを得ない。平井の原則の抽象性や保育者の意図性についての言及の少なさは、自由保育という言葉に引き継がれ、その子ども中心主義的性格から保育を放任に近づけかねない危うさのあるものであった。『これからの保育』などに見られる自由保育思想は、平井の行った保育の問い直しだけでなく、その問い直しに保育実践上の意義を与える、大場牧夫や本吉圓子、そして、保育問題研究会の発想との中継役でもあるやや立場の違う海卓子などの実践の積み重ねを含みこむことで意義深いものであったといえる。

大場牧夫の『幼児の生活とカリキュラム』は、三木安正らの『年間保育計画』に、幼児期の教育の目標や領域を総合的に捉える発想、集団生活の発展を意識した計画である点などで強く影響を受けていた。集団生活に対する問題意識や三木らの知見は『幼児の生活とカリキュラム』にも反映されていることから、大場が自由保育運動に影響を与えていったとすれば、当時望ましいものとして受容された自由保育は、集団主義の保育の成果を取り込み発展をした発想であるとされる。

大場らによる桐朋幼稚園のマスタープランは、集団づくりを意識しながらも、個と集団の関係を問題にすることで集団主義保育の成果を、やや個を中心としたものへと寄せたものであった。

『幼児の生活とカリキュラム』における自由保育の自由主義的特徴である個への注目に関しては、次の2点を指摘できる。第1に、マスタープラン上での具体的な個への着目はそれほどなく、一般化された子どもの姿を前提に計画は作られ、実践記録や個人への働きかけの事例によ

で具体的な個と集団の関係の説明が補われていることである。個人の心情への配慮という自由保育に引き継がれる新しい着眼点は少数認められるものの、マスタープランでの個への言及の具体性については『年間保育計画』と決定的な差は認められず、集団ではなく具体的な個に着目する点が自由保育的発想の特徴であるとはいえないことが指摘できる。第2に、集団としての望ましさや集団のなかの個としての側面よりも、個々の集団への意欲や、集団としてではない個の思いを尊重していることが指摘できる。これには集団生活の発達を軸とした計画でないことも影響しているものの、集団としての望ましさよりも、個々の子どもの心情への配慮に重点がおかれていると評価できるものである。集団の望ましさよりも集団の一員である個の心情に配慮する部分こそが、望ましい行動の背後に個人の動機を見取る自由保育的な発想にある心情であるといえるだろう。こういった転換のなかで、集団における個への意識という発想は、個がどのように集団と関係を切り結ぶのかという発想へと変化していったといえる。

本吉圓子によって主導された『保育専科』の0～5歳児保育内容研究会では、本吉らが志向した特徴的な保育を指導計画として示そうと試みられた。こういった指導計画に自由保育的な発想を織り込もうとする試みは、指導計画に一定の改善を加えたものの、独創的な保育実践の記録の影響と比べると、自由保育に与える影響は限定的であったと考えられる。

0～5歳児生活内容研究会の指導計画は、保育者の配慮や留意点を重視し重点的に記述することによって、従来の保育に対する批判的意識や本吉らの実践を通じた保育観を示すことに部分的に成功している。しかし、そういった記述は非常に具体的な内容となりやすく、説明にはかなりの文章量を必須とするものであった。指導計画は十分に紙幅を費やせるものではないが、その中で否定の形でめざす保育をはっきり書き、配慮の意図や手立てを具体化する詳細な記述をすることによって、本吉らは自由保育的な実践を指導計画に落とし込もうとしていた。結果として総合的で簡潔なねらいと、対照的に部分的かつ具体的で詳細な子どもの姿や配慮を中心としたのが、1983年度の0～5歳児生活内容研究会の指導計画である。本吉らが意図した活動や経験の羅列を避けるという点に関しては、保育者の配慮や留意点を充実させる形で乗り越えようとしている。とはいえ、紙幅に制約のある指導計画は自由保育の保育実践を具体的に構築するには不十分な情報量に留まるメディアであった。また、それらの詳細な記述をもってしても、本吉らのめざす保育を指導計画だけから十分に理解することは難しい。発達や個に応じるといった当時の保育と共通する価値に関しては、研究会がめざす保育を指導計画に起こしきれたとは評価し難く、年間指導計画や抽象度が高い記述では、ほかの指導計画との区別が十分にはできないためである。さらに、記載された失敗を含めた計画は本吉らのこれまでの実践の積み重ねの成果として存在しており、指導計画上の記述からは本吉らの意図を部分的にしか読み取ることができない。この指導計画は、本吉らがめざす保育を実践記録などで理解していた場合によく保育の指針として十分に機能するものであり、指導計画というエッセンスだけから本吉らの理想の保育を再現することは困難であった。

(3) 1980前半の指導計画に見られる自由保育の受容の特徴

自由保育「運動」を牽引した主要な論者たちの影響を受け、1980年代前半には自由保育は保育の中心的な発想の1つとなり、同時に放任傾向を生むものとして批判を受け始める。この時期の自由保育の受容実態からは、自由保育という発想がどのような保育実践に取り入れられるかによって全く異なる意味をもつことになることが明らかになった。

1980年代前半の『保育専科』の指導計画からは、課業中心の保育実践が少なからず存在し、一方でより自由な保育をめざし、自由遊びなどを重視する実践も存在していたことが読み取れる。この両方に、自由保育運動と称すべき自由保育をめざす機運は影響を与えた。指導計画からは、個人差への配慮、一対一の対応の重視、興味や意欲を育むことの強調という共通した特徴がみられた一方で、無理強いさせないことに関する程度や、見守るとはどのような行為なのかなどに関しては見解の不一致が確認できる。

課業中心の保育実践では、20分ほどの細切れの時間に活動が分けられ、当時から小学校の授業のようだとして批判する者もあったほどに明確な知識・技能などの習得をめざした実践が行われていた。こういった保育では活動と教育内容の関係は極めて厳格に設定される傾向にあり、課業の自由度は低かったはずである。自由保育の理念は活動の選択肢や導入時点の子どもの活動の自由度を増やす働きをし、表現に関するものなどを中心に特に明確な教育内容を含めない形で意欲を喚起したり、体験したりすることを目的とした活動を加えることにつながった。

一方で、従来から自由な保育を重視していた側は、自由保育の理念が重視されることによって、そして自由保育の理念が個別の知識・技能の育成よりも意欲などの汎用的コンピテンシーを強調するために、保育行為における保育者の意図の不明確化という課題に直面することになっていった。指導の意図などを明確にできる場合には、計画において保育者の配慮などを詳述することによって自由な活動を出発点としながら指導意図と活動の自由性を両立させる指導計画を記述できていたが、遊びの素朴な教育力に信頼を置いて自由を重視する場合には、活動の自由度を高めるなかで教育内容が不明確な指導計画となりかねなかったのである。自由な保育をめざして自律的な実践を展開していた保育者たちは自由保育の機運によって影響を受けなかったが、自

由保育の理念への賛同を示し、従来から意欲の育成などを志向していた場合には、少なくとも指導計画の活動からは、学びに関する具体的な計画があいまいになる傾向が確認できる。そのため、自由保育の受容は、具体的な乗り越えるべき点がないままに自由保育に賛同する側に対して指導を具体的に計画することを阻害していたと指摘できる。

以上のように、自由保育の理念のうちの主要な部分は様々な指導計画で確認可能な程度に共有されていたが、その影響はそれまでの保育に関する考え方によって異なる現れ方をしたと考えられる。制約の強い保育を実施していた場合には従来より自由で汎用的なコンピテンシーと具体的な活動で得られる知識・技能のバランスを取ろうとする指導計画となる形で、自由な保育を従来から志向しかつ明確な保育観をもたない場合にはそれまで以上に自由であるために教育内容や手続きの不明確な指導計画となる形で、自由な保育を志向している場合でも明確な保育観がある場合にはその価値観を保育者の配慮などに詳述し教育意図の明確な指導計画となる形で、自由保育は受容されたのである。明確な軸をもたなかった場合には従来から自由な保育を志向していた側も、目的が明確でないままにさらにより自由な保育を志向することとなったという点が、この期の自由保育受容の特徴といえる。自由保育の議論では保育者側の主体性が重要であると強調されていたが、指導計画の検討からは、指導の意図の明確でない自由保育への賛同が放任に近い状況を生じさせていたことが推測される。自由保育「運動」は、個よりも集団を重視する保育や課業中心の保育が展開されていた場合には現状の保育に対する効果的な保育論として機能したものの、より自由な保育が実現され何からの自由が必要であるのかが不明確になると、子ども中心の原理を無批判に許容し、保育者の主導性を損なう発想として機能することになっていたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武内裕明	4. 巻 69
2. 論文標題 『保育の手帖』における鈴木とくの保育論 - 自由保育的発想との関連性を観点として -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 265-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武内裕明	4. 巻 68
2. 論文標題 1964年以降の『保育の手帖』における保育内容研究会の議論の検討 - 自由保育的発想への影響を観点として -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武内裕明	4. 巻 127
2. 論文標題 自由保育を伝えるメディアとしての指導計画の有効性 - 0～5歳児生活内容研究会による指導計画の検討から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 157-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 武内裕明	4. 巻 67
2. 論文標題 1980年代前半の『保育専科』における自由保育の受容実態の検討 - 「指導計画と指導の実際」の連載記事の分析から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国四国教育学会 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 218-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武内裕明
2. 発表標題 大場牧夫の『幼児の生活とカリキュラム』の検討 - 集団生活の構造化における個の扱いに着目して -
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武内裕明
2. 発表標題 『保育の手帖』における鈴木とくの保育論 - 自由保育的発想との関連性を観点として -
3. 学会等名 中国四国教育学会第75回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武内裕明
2. 発表標題 『保育の手帖』における平井信義らの3歳児保育に関する記事の検討 - 平井の自由保育論との関連を中心として -
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武内裕明
2. 発表標題 1964年以降の『保育の手帖』における保育内容研究会の議論の検討 - 自由保育的発想への影響を観点として -
3. 学会等名 中国四国教育学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武内裕明
2. 発表標題 1980年代前半の『保育専科』における自由保育の受容実態の検討 - 「指導計画と指導の実際」の連載記事の分析から -
3. 学会等名 中国四国教育学会第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武内裕明
2. 発表標題 『保育専科』における0～5歳児生活内容研究会による指導計画（1983年度）の検討
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関